

第5章 総括

CADを用いた遺構変遷図の作成 最後に、これまでの常三島遺跡の調査で検出された主要な遺構の変遷を概観することで、本書のまとめに代えたい。ここでは、本調査室に新たに導入したCADソフトウェア（オートデスク社製・AutoCAD2015）を用いて、作成した図をもとに検討を進める。今日、CAD（Computer-Aided Design）はGIS（Geographic Information System:地理情報システム）とならんで、考古学分野に広く普及しているアプリケーションのひとつであり、常三島遺跡のような武家屋敷跡などの遺跡の空間情報を管理するのに最適かつ簡便なものである。

作業はまず、これまでの各調査地点での主要な遺構を抽出することから始めた。これには、正式報告書と概要報告書^{註1)}などに記載された情報をもとに、各調査地点の主要遺構を選び出すとともに、その所属時期を把握した。そして、この作業をふまえ、各調査地点の遺構全体図のなかの主要遺構を色塗りし、それをスキャナーで取り込み、デジタル画像化（jpeg形式）した。つづいて、画像化された各調査地点の遺構全体図を、AutoCADの仮想空間座標上に位置づける作業を行った。画像のなかに地理座標の既知点が二つあれば、「移動」「回転」「尺度変更」のコマンドを用いて、この作業を簡単に実行することができる。しかし、各調査地点の遺構全体図は、最近の調査を除いて、地理座標が記録されておらず、周辺の建物の角などの2点の記録によって、それらとの相対的な位置関係がわかるものがほとんどであった。そこで、こうした地理座標の不明な遺構全体図を配置するため、徳島大学常三島キャンパス建物配置図（本学施設マネジメント部作成）を、まず座標上に位置づけた。AutoCADの尺度単位をkmとし、少数点以下6位まで表記することで、平面直角座標1mm精度で、仮想空間上への測量図の配置が可能である。こうした単位の設定をもとに、建物配置図を手がかりにして、各調査地点の遺構全体図を配置した。そして、あらかじめ色塗りした主要遺構を、時期ごとに画層（レイヤー）を分けて「ポリライン」でトレースした。

以上の作業過程を経て作成されたdwgファイル（AutoCAD独自のファイル形式）を、Adobe社製・Illustrator CCで加工したものが第162～166図である。これらの図をもとに、各時期の主要遺構に関わる情報を以下、要約したい。なお、時期区分は、これまでの調査結果から判明した、遺構の時間軸上の画期にもとづいて、Ⅰ期（17世紀前半）・Ⅱ期（17世紀後半～18世紀前半）・Ⅲ期（18世紀後半～19世紀中葉〔幕末〕）・Ⅳ期（19世紀後葉〔明治期〕）を用いた。また、主要遺構の一覧は、第32～34表を参照されたい。

Ⅰ期（第162図） 火葬墓・素掘り舟入状遺構・溝・造成土・池状遺構・石列がある。遺構の時期は、最もさかのぼっても17世紀前半であり、それより古い時期の土地利用の実態は不明である。第3・5次調査では、屋敷地内で火葬墓が検出された。その後、出土した人骨を精査した結果、この火葬墓の被葬者は成年前半・男性であり、下肢を曲げた右側臥位の姿勢で木棺に納められ、600℃以上の高温で焼かれたことが分かった（端野・米元2016）。この火葬骨と木棺あるいは燃料の薪とみられる木片の炭素年代測定の結果はおおむね17世紀前半ごろで整合していることから（加速器分析研究所2017）、ここではⅠ期に位置づけている。第15次調査では、絵図に描かれた徳島藩船置所に所在する

船着場跡とみられる 17 世紀前葉～中葉の素掘り舟入り状遺構が確認されている。この遺構の最下層から土壌を採取し、花粉分析を行った結果、ガマ属－ミクリ属の生育する淡水環境が推定されている（金原・金原 2005）。第 16 次調査では、舟入り状遺構の北側にある水路の西端にあたる可能性が高い溝（宅地化前の江戸初期）が検出されている。第 10 次調査地点では、17 世紀前半の造成土が確認されている。これは、船置所移設後の造成工事跡の可能性が高い。第 20 次調査では、内部に水場利用施設とみなせる石組み遺構を有する池状遺構が検出された。石組み遺構の盛土から出土した遺物の年代と、石組みの下から出土した桶の炭素年代測定の結果（第 4 章第 3 節）からみて、17 世紀前半に築造されたものと考えられる。第 21 次調査では、常三島地区の南限を示す石列が検出されている。『阿波国徳島城之図』（正保 3 年〔1646〕作成、個人蔵）、『阿波国渭津城下之図』（天和 3 年〔1683〕作成、国文学研究資料館史料館蔵）、『城下町切絵図 常三島』（元文年間〔1736～1741〕作成、徳島県立博物館蔵）といった絵図には、常三島の南辺に石垣がはっきりと描かれており、この石列はその一部にあたる可能性が高い。こうした絵図の存在からみて、17 世紀中頃から 18 世紀前半にかけて、石垣は付近から視認し得る状態にあったとみられるが、土層の堆積状況（三阪 2016）をみると、18 世紀後半以降のどこかの時点で盛土により、埋没したものと考えられる。

Ⅱ期（第 163 図） 屋敷境溝・屋敷区画溝・建物跡・畑跡・井戸・溝・石組み舟入状遺構・造成土・池状遺構・石列がある。この時期になると、遺構数が急激に増加する。第 1・6・11・17・19 次調査では、屋敷境溝あるいは屋敷区画溝が検出されている。この時期から、屋敷境を表示する二条の溝が顕在化する。第 11 次調査で検出された屋敷区画溝は、屋敷表を区画するものであり、北側のそれは門と思われる建物跡を伴う。建物跡はこのほかに、第 13 次調査の北側でも検出されている。第 8 次調査では、畑跡とみられる鋤痕が高密度で検出されている。この場所は絵図からみて、長谷川家屋敷地の裏庭にあたる。第 11・17 次調査では、井戸が検出されている。第 10・13 次調査では、民澤家屋敷地を分断する東西方向の溝と、それに接続する南北方向の溝の一部が検出されている。このうち、東西方向の溝については、第 10 次調査で橋脚遺構が確認されている。また、第 13 次調査では、南北方向の溝と東西方向の溝とが交わるコーナーに土留め遺構が確認されている。第 15 次調査では、17 世紀後半から 18 世紀の石組み舟入状遺構が検出されている。これを、徳島藩船置所が移設した後、私的な水運を行うために造られた船着場とみる見解が提出されている。この遺構の最下層から土壌を採取し、花粉分析を行った結果、ガマ属－ミクリ属が認められず、ヨシとみられるイネ科のみが生育する汽水環境が推定されている（金原・金原 2005）。第 17 次調査では、17 世紀前半に徳島藩船置所があった安宅島の北側の水路を埋め立てたとみられる造成土が検出されている。時期は 17 世紀後半とされる。第 20 次調査で検出された池状遺構は、前時期から引き続き、利用されたものと考えられる。第 21 次調査の石列（石垣）は、先述の通り、この時期までは確実に視認し得る状態にあったとみられる。

Ⅲ期（第 164 図） 屋敷境溝・屋敷区画溝・石組み溝・建物跡・埋甕遺構・畑跡・井戸・溝・石組み遺構・石敷き遺構・道路・道路側溝・土坑・池状遺構がある。この時期に遺構数はピークを迎える。屋敷境（区画）溝は、前時期よりもさらに多くの地点（計 13 地点）で、検出されている。第 11 次調査では、素掘りの屋敷区画溝に加え、石組み溝も検出されている。これも素掘りの区画溝と同様、屋敷表を区画する機能を有するものと考えられる。徳島地区に所在する新蔵遺跡では、素掘りの屋敷境溝より遅れて、

19世紀に石組みの屋敷境溝が出現するが（中原 2015）、常三島地区でも同様の傾向があるのか、今後の調査をふまえて検討していく必要がある。建物跡は、計7地点で検出されている。このうち、第2次調査のそれには、青銅製品埋納遺構が伴う。この遺構は、地鎮祭や何らかの呪術的な儀式に際して、家の縁辺部に埋納された痕跡とみられる。また、第4次調査のそれは、常三島遺跡で唯一の雨落溝が伴う例である。第2次調査では、埋甕遺構が検出されている。これは、甕の内面に尿起源の石灰分が付着していたことから、便所と推定されている。第4・8次調査では、畑跡が検出されている。このうち、第8次調査のそれは、前時期から継続するものである。第11・15・16・17次調査では、井戸が検出されている。第4・10・15次調査では、溝が検出されている。第4次調査の溝は、雨落溝を伴う。第10次調査の溝は、前時期から継続するものである。第4・11次調査では、石組み遺構・石敷き遺構が検出されている。用途は不明である。第13次調査では、道路とそれに伴う側溝が検出されている。道路は、固くたたき締められたとみられる硬化面からなる。第15次調査の土坑は、前時期の石組み舟入状遺構が埋没した後、そのくぼみを廃棄坑として利用したものである。第20次調査の池状遺構は、前時期から継続したものとみられる。

IV期（第165図） 方形水溜遺構・井戸・石組み遺構・建物跡・畑跡・溝・水田・揚水施設・暗渠・池がある。これまで調査された遺構はそれほど多くない。第2次調査の方形水溜遺構は、明治期以降の水田化に伴い、造られた農業用の水溜施設とみられる。これには、井戸が伴う。第4次調査で検出されている石組み遺構・建物跡・畑跡・溝などの遺構は、前時期から継続するものである。第15次調査では、水田・揚水施設・暗渠・溝が検出されている。水田では、ほぼ全面で鋤痕が、畦部で作物を植えたと思われる痕跡が確認されている。畦部で検出された痕跡内とその周辺の土壌を採取して行った花粉分析の結果は、水田と畑地の存在を示唆し、畦部の痕跡はササゲ属やソラマメといった豆類が植えられていたとみなされている（金原・金原 2005）。第17次調査では、池と暗渠が検出されている。

第14次調査地点（第166図） このほか、常三島キャンパス北側に位置する総合グラウンドでの第14次調査では、18世紀以降（Ⅲ期）のものともみられる土手と明治期（IV期）の溝が確認されている。

以上、主要な遺構の変遷を概観したが、その多くは未報告であり、概報からの限られた情報による。そのため、遺構の時期決定については、暫定的なものであることを断っておきたい。また、ここで示した遺構の変遷は、概報から時期を知り得たものに限っており、遺跡全体の形成過程をトレースしたものとは到底いえない、きわめて大雑把なものにとどまっている。今後、正式報告を行うたびに、整理作業の成果をふまえて、遺構変遷図をより精緻なものへと更新していく予定である。（端野晋平）

註

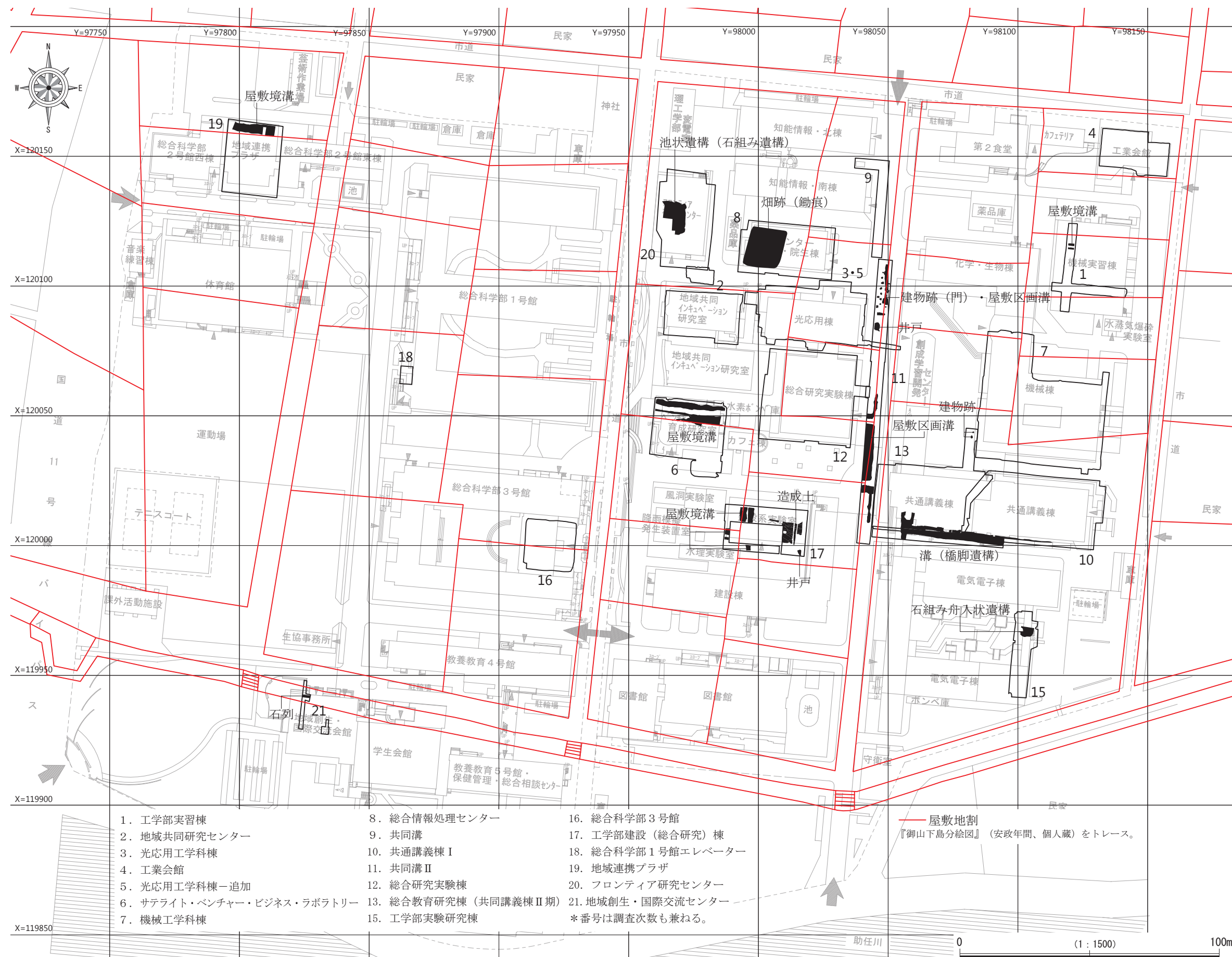
1. 正式報告書と概要報告書のPDFファイルは、本調査室のホームページ（<http://tokudaimaibun.jp>）よりダウンロードできる。以下の文章では、煩雑さを避けるため、これらについてはとくに引用しない。第12次調査（工学部総合研究実験棟新営地点）については、本調査室が保管する原図を用いた。

文献

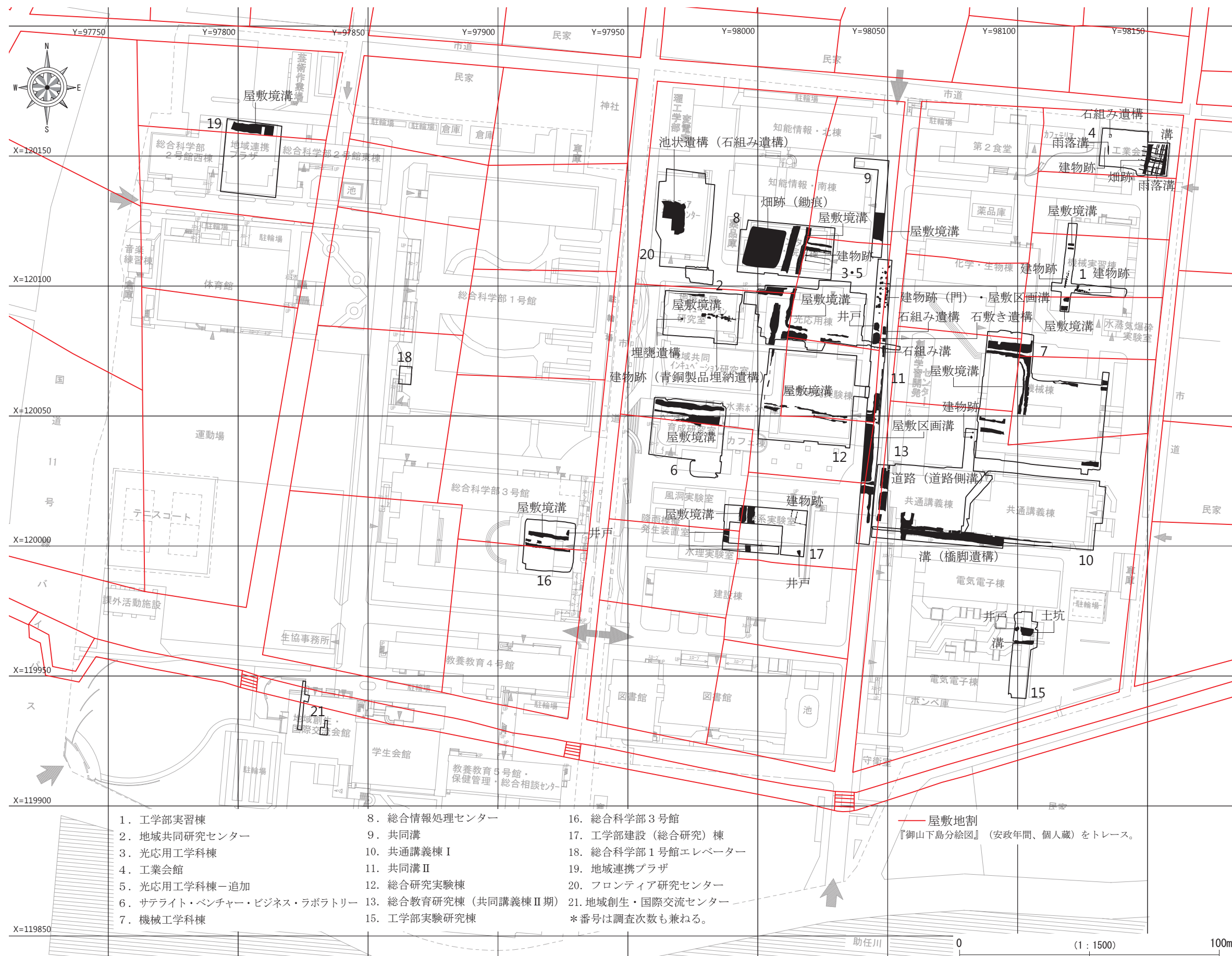
- 加速器分析研究所, 2017. 常三島遺跡第3・5次調査における放射性炭素年代測定. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 3, 127-131.
- 金原正明・金原正子, 2005. 常三島遺跡工学部電気電子地点における花粉分析. 定森秀夫(編), 常三島遺跡1-工学部電気電子棟地点-. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 72-77.
- 中原計, 2015. 総括. 端野晋平(編), 新蔵遺跡-地域・国際交流プラザ地点-. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 555-558.
- 端野晋平・米元史織, 2016. 常三島遺跡の近世火葬墓. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 37-51.
- 三阪一徳, 2016. 常三島遺跡地域創生・国際センター新営に伴う試掘調査. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 2, 63-72.



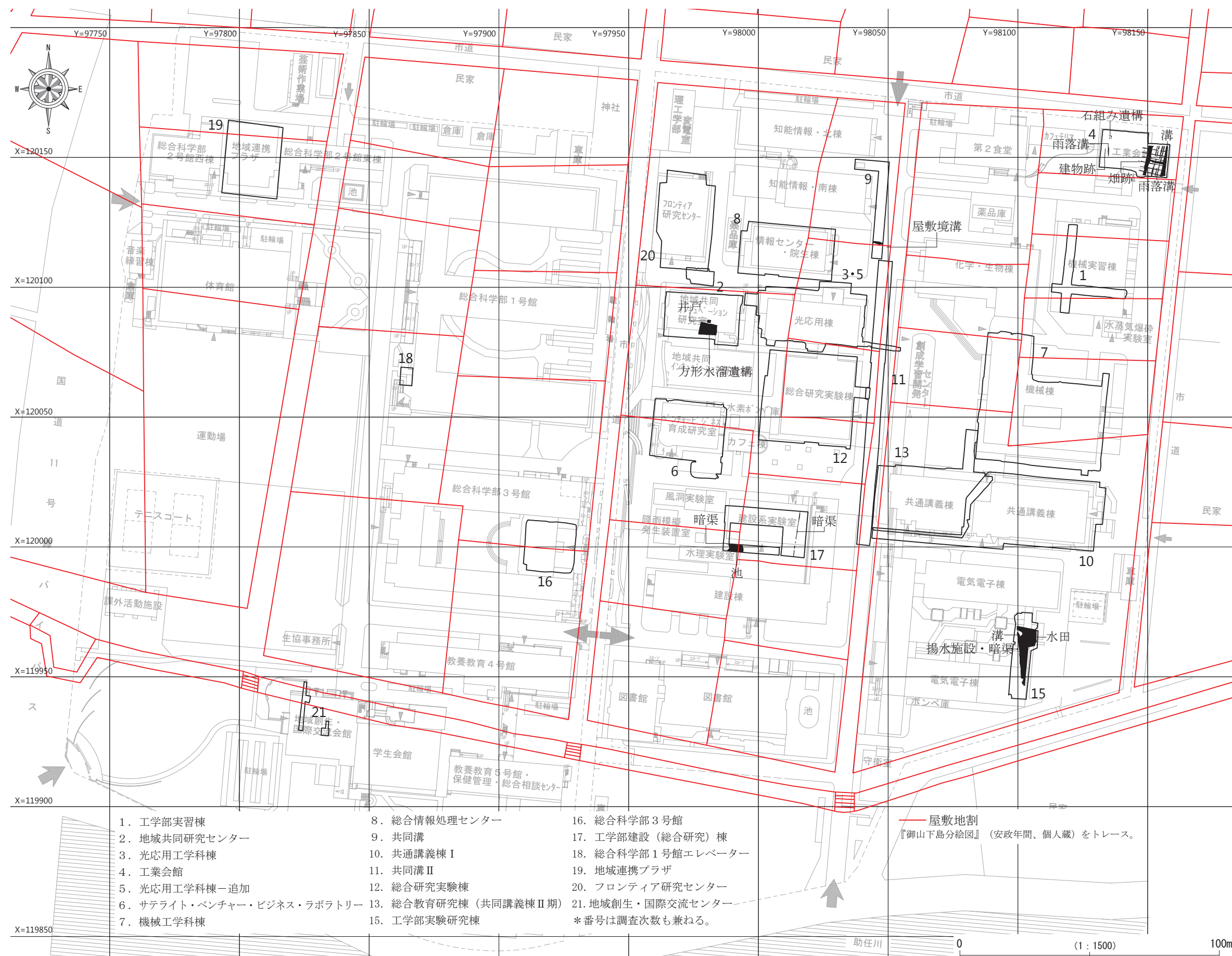
第162図 常三島遺跡の主要遺構 (I期)



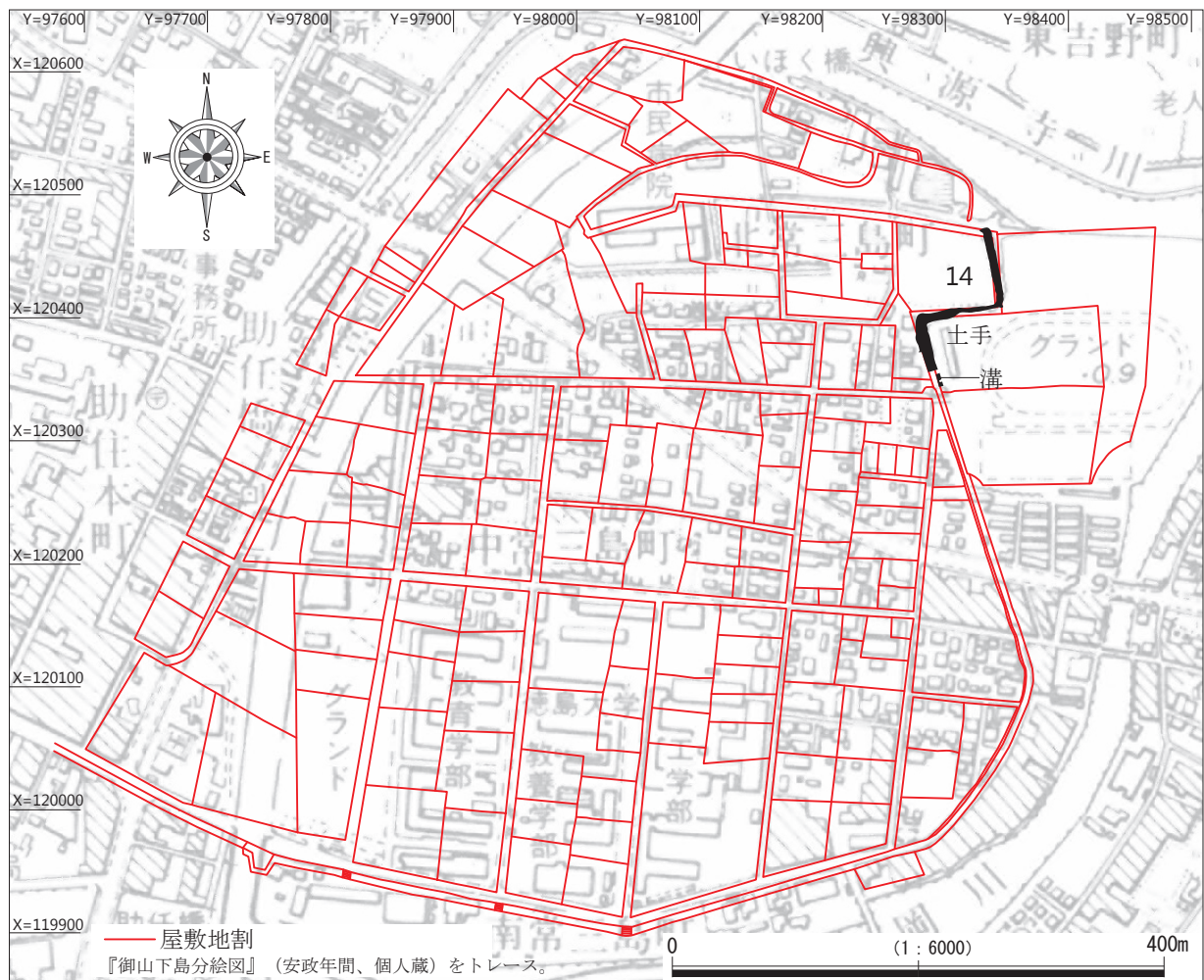
第 163 図 常三島遺跡の主要遺構 (Ⅱ期)



第 164 図 常三島遺跡の主要遺構 (Ⅲ期)



第165図 常三島遺跡の主要遺構 (IV期)



第166図 常三島遺跡第14次調査地点の遺構
下図は国際航業株式会社調整『徳島市全図2』をもとに作成。

第32表 常三島遺跡の主要遺構一覧(1)

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別時期	詳細時期	数量	備考
1	工学部実習棟	屋敷境溝	II・III	17世紀～19世紀	2	
		屋敷境溝	III	18世紀末～	2	
		建物跡	III	19世紀	2	
2	地域共同研究センター	屋敷境溝	III	19世紀中頃	1	
		埋甕遺構	III	19世紀中頃	1	
		井戸	IV	19世紀後半(明治期)	1	
		方形水溜遺構	IV	19世紀後半(明治期)	1	
		建物跡	III	幕末	1	
		青銅製品埋納遺構	III	幕末	1	
3・5	工学部光応用工学科棟	屋敷境溝	III	18世紀後半～幕末	6	
		火葬墓	I	17世紀前半	1	
4	工業会館	石組み遺構	III・IV	19世紀後半(幕末～明治初期)	1	
		建物跡	III・IV	19世紀後半(幕末～明治初期)	1	
		雨落溝	III・IV	19世紀後半(幕末～明治初期)	5	
		畑跡	III・IV	19世紀後半(幕末～明治初期)	6	畝間とみなせる複数の溝を確認
		溝	III・IV	19世紀後半(幕末～明治初期)	3	
6	サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー	屋敷境溝	III	18世紀後半～幕末	2	
		屋敷境溝	II	17世紀～18世紀	2	
7	工学部機械工学科棟	屋敷境溝	III	18世紀後半～19世紀	10	
8	総合情報処理センター	畑跡(鋤痕)	II・III	17世紀～19世紀	-	実測図なし
		屋敷境溝	III	18世紀後半掘削	2	
		屋敷境溝	III	19世紀再掘削	2	
		建物跡	III	幕末	1	
9	共同溝	屋敷境溝	IV	19世紀後半	1	
		屋敷境溝	III	18世紀末～19世紀前半	1	
		屋敷境溝	III	18世紀後半	1	
10	工学部共通講義棟/共同溝II-4区	橋脚遺構	II・III	18世紀前半～幕末以前	1	幕末期は陸橋
		溝	II・III	18世紀前半掘削	1	民澤家を南北に分断
		溝	II・III	18世紀前半掘削	1	道路の側溝?
		造成土	I	17世紀前半	1	水軍移動後の造成工事の可能性が高い
11	共同溝II-1区	建物跡(門)	III	18世紀後半～19世紀	1	
		石組み遺構	III	18世紀後半～19世紀	3	

第33表 常三島遺跡の主要遺構一覧(2)

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別時期	詳細時期	数量	備考
11	共同溝II-1区	石敷き遺構	III	18世紀後半～19世紀	1	
		石組み溝	III	18世紀後半～19世紀	1	屋敷表を区画
		建物跡(門)	II・III	18世紀前半～後半	1	
		井戸	II・III	18世紀前半～後半	1	
		屋敷区画溝	II	17世紀～18世紀前半	2	屋敷表を区画
		井戸	II	17世紀～18世紀前半	1	
		屋敷区画溝	III	18世紀後半～19世紀	5	屋敷表を区画
		石組み溝	III	18世紀後半～19世紀	1	屋敷表を区画
		屋敷区画溝	II・III	18世紀前半～後半	4	屋敷表を区画。一つは17世紀までさかのぼる可能性あり
		屋敷区画溝	II	17世紀～18世紀前半	1	屋敷表を区画
12	総合研究実験棟	屋敷境溝	III	幕末	3	
13	工学部総合教育研究棟	道路	III	幕末	1	
		道路側溝	III	幕末	1	
		溝	II・III	18世紀掘削	1	屋敷地内の大溝。土留め遺構を確認
		建物跡	II・III	18世紀～幕末	1	
14	総合グラウンド管理舎・器具庫	溝	IV	明治期	1	
		土手	III	18世紀～	1	寛永2(1790)年以降の絵図で確認
15	工学部電気電子棟	素掘り舟入り状遺構	I	17世紀前葉～中葉	1	徳島藩船置所に所在した船着場。花粉分析を実施
		石組み舟入り状遺構	II	17世紀後半～18世紀	1	私的な水運に利用した船着場か。花粉分析を実施
		土坑	III	18世紀後半～19世紀	1	廃棄坑
		溝	III	18世紀後半～19世紀	1	
		井戸	III	18世紀後半～19世紀	1	
		揚水施設	IV	明治期	1	
		暗渠	IV	明治期	1	
16	総合科学部3号棟	水田	IV	明治期	1	鋤痕、作物を植えた痕跡を確認。花粉分析を実施
		屋敷境溝	III	幕末	2	
		井戸	III	幕末まで下らない時期	1	

第 34 表 常三島遺跡の主要遺構一覧 (3)

調査 次数	調査地点	遺構の種類	大別時期	詳細時期	数量	備考
16	総合科学部3号棟	溝	I	江戸初期(宅地 化前)	2	一つは舟入り状遺構の北 側にあると思われる水路 の西端の可能性高い
17	工学部総合研究棟	暗渠	IV	明治期	2	
		池	IV	明治期以降	1	
		屋敷境溝	III	19世紀～幕末	4	
		建物跡	III	幕末	2	
		屋敷境溝	II・III	18世紀	4	
		井戸	II・III	18世紀	1	
		屋敷境溝	II・III	17世紀後半～18 世紀	5	一つはごく初期の可能性 あり
		土坑	II	17世紀後半	1	
		造成土	II	17世紀後半	1	安宅島の北側の水路を埋 め立てた土
19	地域連携プラザ	屋敷境溝	II・III	17世紀後半～19 世紀	1	
20	フロンティア研究センター	池状遺構	I～III	17世紀前半～幕 末	1	
		石組み遺構	I～III	17世紀前半～幕 末	1	
21	地域創生・国際センター	石列	I・II	17世紀中頃～18 世紀前半	1	絵図に描かれた石垣に相 当する可能性が高い